

及ビ其ノ原血清トニ就テ Atoxyl-牛血清及ビ Lecithin トヲ抗原トスル補體結合反應ヲ試ミ。

(6) 尙ホ Atoxyl-牛血清ヲ以テ免疫セル家兎血清ニ Lecithin 又ハ Atoxyl-牛血清ヲ以ツテ各々ノ抗体ヲ吸收セシメ、其ノ上清及ビ原血清ニ就テ上記吸收基トセル材料ヲ抗原トシテ交叉的ニ補體結合反應ヲ行ヒ。

(7) 一轉シテ Forssman 抗原ニ就テ検索スベク a) 馬腎浸出液ト Atoxyl-牛血清トノ混和物ヲ免疫元トシ、b) 馬腎浸出液ニ Atoxyl-牛血清ト豚血清トヲ混和シタルモノヲ加ヘテ免疫元トシ、c) 馬腎浸出液ニ豚血清ヲ加ヘタルモノヲ免疫元トシテ、夫々家兎ヲ免疫シ夫等ノ免疫血清ヲ以テ羊血球溶血素即チ Forssman 抗体ノ產生ヲ檢シ、8) 最後ニ上記免疫血清ノ各々ニ就テ馬腎浸出液及ビ Lecithin ヲ抗原トシテ補體結合反應ヲ試ミテキル。

以上ノ實驗成績カラ次ノ如ク結論シテキル、Diazotiertem Atoxyl 又ハ Metanil Säure ト血清トヲ混和シタ所謂化學的特異性ヲ有スル複合抗原ヲ以テ家兎ヲ免疫スレバ多クノ場合善ク存在スル類脂體殊ニ Lecithin ニ對ス

ル抗体ヲ產生スル、而シテ此ノ際免疫血清ノ類脂體及ビ化學的抗原ニ對スル反應度ハ互ニ略ク平行スルモノデアル。

Chemospezifisch ノ免疫血清ノ類脂體抗原ニ對スル作用域ハ全然 identisch テハナイマテモカノ Lecithin ヲ以テ得タル免疫血清ノ夫レト非常ニ類似シテキル。

Chemospezifisch ノ抗原及ビ類脂體ニ對スル抗体ノ作用ハ稀薄鹽酸ヲ其ノ血清ニ加フルコトニヨツテ劃分スルコトガ出來ル、而シテ此ノ際 Chemospezifisch ノ抗体ハ Albumin ニ移行シ類脂體抗原ハ Globulin ニ移行スル。

Chemospezifisch ノ抗原ニヨツテ類脂體抗体ノ產生サル、コトハ化學的特異性ノ複合抗原(?)ガ第一ニ一時的變化ヲ被ツタ血清類脂體ヲ disponibel ニスルコトニ依ツテ説明サレル然シ此ノ説明ハ推斷トシテモ無理ガアル。

Forssman 類脂體ニ對シテ Chemospezifisch ノ複合抗原ガ Schlepper (免疫元トシテノ類脂體ニ附加スル蛋白質即チ血清ノ如キ物質)ノ働ラキヲナサヌコトモ判ツタ、然シ其ノ意義ニ就テハ今後ノ研究ニ俟タテバナラス。

## 雜

## 報

### ○講習終了式舉行(公衆衛生講習)

12月15日(月)午前11時半ヨリ所内講堂ニ於テ第69回講習終了式舉行サレ、所長ノ代理トシテ二木教授ヨリ講習證書ノ授與アリ、且ツ一同ニ對シテ訓辭サル、トコロガアツタ、式後例ニ依リ記念撮影ヲナシ食堂ニ於テ終了生送別ノ宴ガ催サレタ。

### ○學術集談會開催

12月18日(木)午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會開催演題ハ次ノ四題デアツタ。

1. ストレプトトリックスニ關スル研究  
山内光雄君
2. パラチフスB型菌ノ毒力ニ關スル研究  
特ニ毒力ト生物學的及ビ免疫學的性狀トノ相互關係  
小島榮次郎君
3. 鶏接種ニ據リテ馬ノ傳染性貧血ヲ診斷シ得ル乎  
城井尚義君  
池田武夫君
4. 病原性リッケッチャニ就テ(綜説)  
田宮猛雄君  
以上

### 十二月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
11.1	叙正五位	教授	田宮 猛雄
11.29	醫師試験委員被仰付		
		教授	二木 謙三
	同	技師	石原喜久太郎
12.1	陞叙高等官五等	技師	野邊地慶三
12.10	傳染病研究所ニ於ケル赤痢 研究業務ヲ囑託ス		一宮勝三郎
12.12	任臺灣總督府結核療養所醫 官兼臺灣總督府醫院醫長		

叙高等官六等 技師 新免 勝

### 第69回講習(公衆衛生學)

終了者氏名 (順不同)

加 藤 恭	高 橋 實知太郎
古 屋 拓之	米 野 英 彦
碓 井 孝 則	大 須 賀 武
福 田 一	大 村 重 光
清 水 豐 馬	山 口 壽
中 村 實	數 内 好 夫
山 田 義 男	

ノ上清液ヲ以テ血清ニ於ケルト全然同様ニ Kahn-Test ヲ行フ、

此ノ方法ニヨレバ高度ノ著色血清ハ無色トナリ、乳糜又ハ他ノ原因ニヨル濁濁血清ハ透明トナル。膽汁ヲ著色シタ血清モ之ノ方法ニ依レバ不愉快ナ物質(譯者註:從來黃膽血清テハワ氏反應ニ際シ非特異反應ヲ呈スルト云フ報告ガアル)モ亦著色モ除去サレル、而シテ此ノ操作ハ總テノ點ニ於テ Kahn-Test ノ眼目

ニ添フテキル、此ノ操作ヲ行ヘバ疑惑反應ノ場合、多少反應度ガ高マリ又ハ低下スルコトガアルケレドモ、然シ一旦其處ニ出來タ沈降物質ハ眞ノ免疫學的因子ニヨル反應ノ結果デアルコトヲ明確ニスルモノデアル、唯留意スベキハ此ノ操作ハ臨牀上微毒ノ有無ヲ疑フ場合ソレヲ決定セントスルモノデハナク單ニ反應ノ結果ヲ明確ニセントスルモノデアル、

## 雜

## 報

### ◎新年式舉行

1月6日午前11時ヨリ所長室ニ於テ新年式舉行、宮川所長代理ノ年頭ニ際シテノ訓辭アリタル後、簡素ナル冷酒ノ宴ガ催サレタ。

### ◎學術集談會開催

1月22日午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會開催、演題ハ次ノ三題デアツタ。

1. 雜凝集性チフス菌ニ就テノ研究

吉田 徹君

2. 「バンコック」ニ旅シテ

山田信一郎。

3. メニンゴコッケン及ビ「ゴノコッケン」感染ニ因スル二三ノ業績(綜説)

西澤 行藏君

### ◎學友會へ寄附金

金百五拾圓也

林 敏 雄君

以上

### ◎一月中職員異動

月日	異動事項	官職	氏名
5年 12.27	敘從三位	教授	林 春雄
"	敘正四位	同	長與 又郎
12.31	昭和5年12月31日付願		研究生退學ノ件許可ス 小澤 眞

ヨツテ報告サレタ。

此ノ現象ニ就テノ Dreyer ノ説明ニヨレバ  
微毒抗体ハ複雑ナモノデアツテ、耐熱性ノ沈  
降素ハ非耐熱性ヲ然カモ沈降反應ヲ抑制スル  
物質ト連合シテキル。而シテ此ノ非耐熱性物  
質ハ補體結合反應ニハ有利ニ作用スルモノデ  
アル。

Kurtz ハ Kahn ノ研究室員 Nishio ノ意見  
ヲ引用シテ血清ヲ加熱スルコトハ沈降反應ニ  
對スル血清アルブミンノ抑制作用ヲ減退スル  
モノデアルト言ツテキルガ、之ハ最モラシイ  
説デアル。然シ又純物理的ノ方法ヲ以テシタ  
ル他ノ現象カラスレバ更ニ他ノ説明モ出來  
テアラウ。

微毒血清ニ用フル slide precipitation (血清  
平板法)ヲ應用セル Butler ノ Antigen ヲ改  
變シタ著者ノ方法デハ、血清ヲ完全ニ乾燥サ  
セルコトニヨツテ血清ヲ非働性ニシタ場合ト  
全ク同様ニ微毒血清ノ沈降作用ヲ呈スルコト  
ヲ認メタ。

實驗トシテ數種混和シタ微毒血清ヲ陰性血  
清ヲ稀釋シテ此ノ働性血清 0.15 ccヲ陰性ト  
ナルヤウニスルソウシテ一方原ノ微毒血清ヲ  
非働性(56°—30°)ニシテ一列ノ食鹽水稀釋液ヲ  
作ル各々ノ稀釋液ヲ 0.15 cc 宛硝子板ニ置ク。  
ソウスルト血液ノ乾イタトキニハ板ノ中央  
ノ部位ニ擴ガル。

一方此ノ乾燥血清ニ用フル Antigen ハ次ノ  
如キ原液ヲ 5 倍ニ稀釋シテ使用スル、Antigen

原液ハ次ノ製法ニヨル、

酒精浸出液(1:10)……(Aceton テ脂肪分ヲ  
除去シタ乾燥牛心  
肉粉ヲ) (90cc)  
浸出ス)

エチールアルコール(98%) (10 cc)

10%精製トルーバルサム酒精溶液 (4.5 cc)

1%安息香酸アルコール溶液(1.25 cc)

Cholesterin(0.56 gm)

以上ヲ混和シタルモノ。シカシ無處置ノ非  
働性血清ニ對シテ 1:4ノ食鹽水稀釋液ヲ用フ  
ル。斯クシテ 0.2 ccノ Antigen 稀釋液ヲ各血  
清板ニ加ヘテ急ニ齒楊子ヲ以テ混和スル。5  
分ノ後成績ヲ讀ム。此ノ混和ノ操作ノ間、時  
々板上ノ混和物ヲ一方カラ他方ヘ移動サシテ  
ヨク混セル。

此ノ實驗ノ成績ヲ見レバ乾燥血清ガ非働性  
血清ト同様ノ沈降價ヲ呈スルコトガ判カル。

血清アルブミンハ hydrated colloid トシテ  
作用スルコトハ Fischer ニヨツテ明ラカナコ  
トデアツテ、而シテ血清學ノ方面デハ種々ノ  
沈降シ易イ system ノ emulsion ヲ作ルニ用  
ヒラレルガ、著有ノ實驗ニ於ケル場合ハ、熱  
ニヨツテ起ル血清アルブミンノ部分的凝固  
ニ因ツテ、コノ system ノ平衡ガ亂サレルコ  
トカ又ハ乾燥ニヨツテ「アルブミン」ガ脱水サ  
レ、而シテ又再ビ溶解サレルタメニ反應ノ抑  
制作用ガ消失スルモノデアラウ。然シ乍ラ再  
ビ溶解シタ「アルブミン」ガ斯クノ如キ作用ヲ  
呈スルヤ否ヤニ就テハ尙ホ疑問デアル、

## 雜

## 報

### ◎第二號本館ノ移轉

豫テ進捗中デアツタ改築工事モ遂ニ厩舎カ  
ラ研究室ニ及ンテ愈々研究所本館ノ新築ニ著  
手サル、コトニナツタ。ソレデ在來ノ第二號  
本館ハ南方ノ塀添ヒニ移轉シテ新築ノ落成ヲ  
待ツコトニナツタ。二號本館ノ各室ハ其移轉  
工事ノ間講堂ニ、後ロノ「バラック」ニ、ハテハ

諸室ニ暫時ノ宿ヲ借りタノデアルガ、ソノ爲  
メ講堂モ目下完全ニ塞ガレテシマツタノテ遂  
ニ2月ノ學術集談會モ中止スルコトニナツタ。  
シカシ3月終リマデニハ二號本館ノ移轉モ完  
了スル筈デアルカラ、移轉ノ曉ハ一時ノ混雜  
モ恢復スル筈デアル。

◎學友會へ寄附金

金五圓參拾六錢也

吉積 泰君

二月中職員異同調

月日	異動事項	官職	氏名
1.31	昭和6年1月30日付願研究生退學ノ件許可ス		水沼 正尙
1.31	昭和6年1月31日付願研究生退學ノ件許可ス		名越 猛熊

- 2. 2 昭和6年1月1日付願研究生  
繼續ノ件許可ス 柏崎 晃
- 2. 3 昭和6年2月2日付願研究生  
入學ノ件許可ス 三田 泰三
- 2. 7 京都府及兵庫縣下へ出張ヲ命  
ス 技師 山田信一郎
- 2. 7 長野縣下へ出張ヲ命ス  
助教授 小島 三郎
- 2. 9 彼勲五等授瑞寶章 教授 三田村篤志郎

出來ナイガ凝固要素ヲ注加スレバ Thrombin ノ證明即チ Thrombin ノ生成ヲ觀察スルコトガ出來ル。

然シ茲ニ考慮スベキコトハ著者が嘗テ報告シタトコロデアツテ即チ 'Antithrombin' ヲ多量ニ含ム Plasma 又ハ遞増量ニ Zytosymphosphatid ヲ加ヘタ血清ノ適當量ヲ用ヒタ場合ニハ輕度ニ感作サレタル血球ノ溶血ヲ増強セシムルコトデアアル。唯コノ際多量ノ Zytosym 注加ハ却ツテ溶血ヲ減弱セシムルモノデアアル。尙ホ著者ハ血液凝固ニ參與スル Zytosym ト Kalziumion トノ關係ヲ敘シ、更ニ Prothrombin ガ Ca-ion 存在ノモトニ Zytosym ノ作用ニヨツテ Thrombin トナルコトヲ述べ而モ此ノ Zytosym ハ Haemolyse ニ際シテ溶媒中ニ移行スルモノナルコトヲ明カニシテキル。他方 Antiprothrombin 及ビ Zytosym トノ關係ニ言及シ兩者ノ結合ヲ Dungern-Danysz-Gesetz ニヨツテ説明シテキル。尙ホ此ノ Thrombinbildung ハ生體ニ於テモ Thrombose ノ生成サレルコトニヨツテ實驗シ得ルモノデアツテ Zytosym ヲ1頓ニ大量注射スルコトニ依ツテ證明ガ出來ル。尙ホ最後ニ此ノ Prothrombin-Haemolyse-Blutgerinnung-Antiprot-

hrombin 等ノ一聯ノ反應ハ彼ノ Northrop ニ依ツテ認メラレタ Pepsin ノ酵素作用ヲ髣髴サセルモノガアル即チ Pepsin ハ Eiweiss ヲ分解シテ Pepton 様物質ガ出來ル。此ノ分解産物ハ反應液ノ中ニ於テ Pepsin ト合致シテ反應ヲ抑制シ所謂 Gleichgewichts Zustand トナル茲ニ於テ反應自身ハ Massenwirkungsgesetz カラ遠ザカルコトニナル。

著者ハ著者ノ數例ノ實驗カラ在來ノ文獻ヲ引用シテ上記ノ如キ檢討ヲ試ミ次ノ如キ結論ヲ導イテキル。

即チ感作血球ガ補體ノ作用ニヨツテ溶血現象ヲ起ス際ニハ二ツノ反應ガ相互ニ發現スル共レハ時間的ニ觀察サレ又他ノ場合ハ赤血球ノ感作ノ程度ニ關係ガアル。モシ感作ガ輕微デアアル場合ハ Haemolyse ニ參與シナカツタ Prothrombin即チ補體中節ノ一部ヲ、溶血球カラ遊離サレタ Zytosymphosphatid ト血清ノ中ノ Ca-ion ノ存在ノモトニ Thrombin ニ變化サセルモノデアアル。尙ホ又溶血現象ノ際ニ補體ノ消費ヲ sekundäre Reaktion トシテ唱ヘタ Liefmann ノ説ハ補體ノ酵素様本態ニ對スル重要ナル論據トサレテキタガ本實驗ニ於ケルガ如キ證明ハ之ヲ缺イテキルモノデアアル。

## 雜 報

◎學友會へ寄附金  
金壹百拾圓六拾壹錢也 池田 清君  
◎三月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
2.26	千葉縣下へ出張ヲ命ス	助教授	小島 三郎
3. 5	埼玉縣下へ出張ヲ命ス	囑託	島崎 正雄
3.11	敍勳五等授瑞寶章	教授	田宮 猛雄
3.16	外務省事務ヲ囑託ス	教授	高木 逸麿
„	ブラジル國へ出張ヲ命ス	外務省囑託	同
„	外務省事務ヲ囑託ス	技手	大和田信道
„	ブラジル國へ出張ヲ命ス	外務省囑託	同

3.19	依願免本官	教授	横手千代之助
3.25	京都府下へ出張ヲ命ス	教授	宮川 米次
„	同	教授	三田村篤志郎
„	同	教授	田宮 猛雄
„	同	技手	江島 眞平
„	同	技手	羽里彦左衛門
„	同	囑託	一宮勝三郎
„	京都府及島根ノ一府一縣下へ出張ヲ命ス	囑託	淺田 順一
3.25	依願東京帝國大學評議員ヲ免ス	教授	長與 又郎
3.31	昭和6年3月30日付願研究		
„	生退學ノ件許可ス		村松 楠雄
„	依願傳染病研究所仁川出張		
„	所土地建物管理囑託ヲ解ク		布施野 寛

シテ重大ナル役目ヲ演ズルモノデアアル。此ノ Aktinomyces ハ體液又ハ排泄物カラノ標本デアアルハ多ク Gram positive デアルトサレテキルガ多クノ例ノ中ニハ検査材料ノ中ニ Gram negative ノ球狀體ノ存スルコトモ屢々デアアル之レハ決シテ Kunstprodukt デモナケレバ Zerfallsprodukt デモナイ。

### 異染小體ノ簡單ナル染色法

Hardy A. Kemp, M. D.

次ノ異染小體染色法ハ Alberts and Neisser ノ同染色法ヨリモ良結果ヲ得ルモノト言ツテキル。即チ Diphtheria 菌ノ染色ニ應用スルモノデアツテ、先ヅ咽頭カラノ塗抹標本又ハ咽頭カラノ培養塗抹標本ヲ普通ノ方法ヲ固定

スル。ソシテ Gram ノ染色ニ用フル Jod 液ヲ塗抹面ニ注グコト1分。流水ヲ以テ洗滌スル。次ギニ Loeffler ノ Methylene blue デ染色スルコト20—30秒。再ビ流水ニテ洗滌シ Saffranine (1%水溶液)染色ヲ施スコト10—15秒。斯クシテ標本洗滌後、乾燥、封固、鏡檢ニ供スル。此ノ方法テハ菌體ハ赤染スルニ反シ極小體ハ黒味アル濃青色ニ染マル。同一標本ニアル他ノ細菌ハ赤染スル。一般ニ Gram positive ノ球菌ハ他ノ菌ヨリモ濃染スルノガ普通デアアル。

以上ノ如ク極メテ簡易ナ方法テ而カモ一般ニ使用サレル染色材料ヲ以テ染色ノ出來ルコトハ即チ本法ノ特色デアアル。

## 雜

## 報

◎學友會懇親會 4月2日、恰カモ開催サレタ各部ノ醫學會出席ノタメ上京サレタ會員ノ歡迎ヲ兼テ、當日午後五時ヨリ丸ノ内東京會館ニ於テ懇親會ガ催サレタ。會員多數ノ出席ヲ得。酒宴ノ間ニ談笑數刻。各位微薰ヲ帶ビナガラ同10時散會。

◎講習開講式舉行 4月10日午前10時、第70回學術講習會ノ開講式ヲ所内講堂ニ於テ舉行シ、本年度春季ノ講習ガ開始サレタ。

今期ノ聽講生下記ノ通り

白井君代	小野精次
天野正也	正谷日出夫
田邊嘉門	朝夷眞二
菅村信之	横矢重利
松本千々石	今井篤
高麗日出夫	秋山文雄
佐藤道雄	廣田龍治
太田武彦	鈴木剛
瀬戸尚二	牛島巍
到津公一	北野春子
澁谷一郎	鹽崎幸

金木弘	上玉利藤四郎
小池善次郎	牧野幸二
妹尾繁壽郎	吉田登喜
佐藤銀一郎	荷見信光
遠藤市治郎	佐藤久藏
吉岡ツグ	石島直輔
塚原國雄	栗本珍彦
岡本啓	柳澤謙
田中正稔	高木堯夫
木村猛明	中村茂一
木下清吉	戸田又生
川瀬五郎	谷茂
中俣甚助	土屋毅

### ◎四月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
3.31	昭和6年3月31日付願研究		
	生退學ノ件許可ス		正津 正榮
4.1	昭和6年4月1日付願研究生		
	入學ノ件許可ス		谷 茂
4.1	昭和6年4月1日付願研究生		
	繼續ノ件許可ス		所 敏一

4. 1 依願免本官 技 手 眞鍋 清明  
 4. 1 陸軍派遣學生 三等軍醫 瀬戸 尙二  
 4.14 廣島文理科大學臨時講師ヲ囑  
 託ス 技 師 山田信一郎  
 4.14 依願傳染病研究所直江津出張  
 所土地建物管理囑託ヲ解ク 近藤 房吉

4.14 傳染病研究所直江津出張所土  
 地建物管理ヲ囑託ス 米澤圭之助  
 4.24 昭和6年4月16日付願研究  
 生入學ノ件許可ス 村 井 發  
 4.24 昭和6年4月23日付願研究  
 生入學ノ件許可ス 新家 借三

此ノ7例テ其ノ血液型ヲ見ルト6例ハ0型テ他ノ1例ガA型デアツタ。一般ニ脊髓液ノ凝集素含量ハ血清ニ比シテ極メテ少量テ反應出現ニ要スル時間モ長クカ、ル。シカシ10—15—20分モ待テバ血清ノ様ニ顯著ニ現ハレル。一般ニ脊髓液ノ凝集素ハ血清ノ其レニ依ツテ推定サレル而シテ特記スベキコトハ、コノ實驗ニ於テ血清ガ凝集素ヲ含ンデキナイ場合ハ同様ニ例外ナク脊髓液ニモ凝集素ヲ含ンデキナカツタガ、3例ニ於テ血清ニハ凝集素ヲ含ンデキルニモ拘ラズ(3例共0型)脊髓液ニハ含ンデキナカツタ例ガアル。シカシ長イ時間ヲ經過シテカラ2例ニ於テハA及ビAB血球ヲ凝集シ、他ノ1例ハ單ニAB血球ノミヲ凝集シタ。之レニ似タ例ハEpstein及ビPodvinec等ハ授乳シテキル母乳ニ於テ起リ得ルコトヲ認メテキル。

以上ノ所見カラ一定ノ例ニ於テハ脊髓液内ニ同種血球凝集素ヲ含有スル場合ノアルコトハ確カデアアルガ次ニ起ル問題ハ然ラバ其凝集素ハ何處テ出來テ、如何ニシテ脊髓液ニ出現シタカト云フ其等ノ機轉デアアル。原因的ニハ二ツノ可能性ガ考ヘラレル。第一ハ血液ト脊髓液トノ境ヲナス、膜腔内ニ於テ發生サル、ト云フコト。第二ニハ血清カラ由來スルコト即チBarrièreノ透過性が高カツタ、メニ脊髓液ニ移行スルコトデアアルガ此2ツノ可能性ノウチテハ後者ノ説ヲ採リ度イ。其ノ根據トシテハ凝集素ガ脊髓液内ニ證明サレタル場合ハ

何レモ血液ト脊髓液ノ境界膜ノ透過性ノ高マツタ疾患ノ場合デアツテ其ノ透過性が通常デアル疾病ノ場合ニハ證明ガ出來ナイノデアアル。而カモ此ノ透過性ノ高マツタ場合ノ例ニ於テハ脊髓内ニ溶血素ノ證明ガ出來又其ノ内ノアル例テハ補體モ證明ガ出來タ。殊ニ3例テハXanthochrom, Liquorデアツタ。而シテ脊髓液其ノ凝集素ノ含量ガ血清内ノ其レニ比シテ著シク少量デアアルコトモ上記ノ根據トナルモノデアツテモシ脊髓膜ニ於テ出來ルモノナラバ斯ク迄モ相違ガ起ル筈ハナイモノト思ハレル。然シ乍ラ斯ノ説ヲ斷定スル爲メニハ上記ノ如キ實驗ダケテハ充分デハナイ更ニ嚴密ナ方法デアルトコロノWalter氏法即チBrommethodeヲ應用シテ境界膜ノ透過性ヲ量的ニ測定スル必要ガアル。然シ兎モ角モ境界膜ノ透過性ノ高上ニアルコトハ首肯出來ルト思ハレル。ソレテ次ニ起ル問題ハ何故ニ透過性ノ高マツテオルト思ハレル全部ノ場合ニ凝集素ガ出現シナイカノ點デアアルガ實驗ノ成績カラ見レバ凝集素ノ出現ヲ見タル脊髓液ニハ同時ニ溶血素モ亦出現シテキルコトデアアルガ著者ハ更ニ此ノ兩者ノ出現ノ關係ヲ検討シ夫レヲ簡單ナガラ實驗的ニ説明ヲ加フルトコロガアツタガ要スルニ此ノ間ノ究明ニ對シテハ更ニ詳細ノ研究ヲ要スベク特ニ中樞神經系統及ビ血液ト神經組織トノ生理的、病理的關係ヲ究明シテ、夫レニ依ツテ本問題モ解説サル、ニ到ルモノデアラウ。

## 雜

## 報

### ○學術集談會

5月21日午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會開催。演題ハ次ノ二題デアツタ。

#### 1. 變粒體トゴルギイ氏裝置

一宮勝三郎君

#### 2. 細菌化學ノ近況(綜説) 小島 三郎君

以上

### ◎學友會へ寄附金

金六拾九圓拾九錢也	吉積 泰君
金參拾圓四錢也	安田 宗一君
金百貳拾五圓也	小池 定雄君

### ◎五月中職員異動調

昭和6年6月1日

月日 異動事項 官職 氏名

4.24	依願免本官	技手	井上 康平		傳染病研究所ニ於ケル治	
4.30	願ニ依リ本職ヲ免ス				療研究業務ヲ囑託ス	高木 堯夫
		公立大 學教授	河本 禎助	4.30	”	中村 茂一
”	依願免本官	技手	小池 定雄	”	”	川瀬 五郎
”	”	同	渡會 陸二	”	”	戸田 又生
”	”	同	柴田 秀夫	”	傳染病研究所ニ於ケル細	
”	傳染病研究所ニ於ケル治			”	菌免疫學研究業務ヲ囑託	
	療研究業務ヲ囑託ス			”	ス	栗本 珍彦
		同	渡會 陸二	”	傳染病研究所ニ於ケル痘	
”	”	同	柴田 秀夫		苗製造研究業務ヲ囑託ス	
”	傳染病研究所ニ於ケル治					佐藤 久藏
	療研究業務囑託ヲ解ク		山岡 克巳	5. 1	兼任名古屋醫科大學教授	
”	”		田淵 俠介		敘高等官二等 教授	河本 禎助
”	”		入澤 廉	5. 1	陞敘高等官四等	
”	”		加藤 英市			助教授 小島 三郎
”	”		寺岡 辰	5. 2	青森縣下へ出張ヲ命ス	
”	任傳染病研究所技手		山岡 克巳			技手 平山 輝夫
”	”		田淵 俠介	”	”	同 中込 亘
”	”		入澤 廉	”	”	同 岡 正
”	”		加藤 英市	5.12	”	技師 城井 尙義
”	”		寺岡 辰	5.14	敘勳四等授瑞寶章	
”	”		田中 正稔			正五位 河本 禎助
”	”		岡本 啓	5.18	醫學博士ノ學位ヲ授與セ	
”	”		柳澤 謙		ラル	技手 羽里彦左衛門
”	傳染病研究所ニ於ケル治			5.21	神奈川縣下へ出張ヲ命ス	
	療研究業務ヲ囑託ス		塚原 國雄			同 菅野 拓三
”	”		木下 清吉			

態ト同一デアツタ。シカシ是等ノ實驗動物ノ少数ニ於テノミ局所ニ連鎖狀球菌が見出サレテ分離培養サレタガ其レハ天然病毒ニヨツテ惹起サレタ場合ノ實驗ト同様ニ極メテ困難デアツタ。

培養上ノ性質。血清反應及ビ毒力ニ於テ觀ルニ天然病毒ヲ注射シタ動物カラ獲タトコロノ連鎖狀球菌ニ因ルモノハ人工培養ヲ經タ同菌ニ因ル其等ト全然同一デアツタ。更ニ感染防禦力ニ就テ觀タノニ天然病毒ヲ移植サレタ動物ノ腦カラ得タ連鎖狀球菌ハ動物實驗ニ於テ人工培養ノ病菌ニ對シテ防禦力ヲ示シ尙ホ又其ノ反對ニ人工培養菌ハ天然病毒ノ侵染ヲ防禦スルコトモ認メラレタ。

### 種々ノ疾患ニ於ケル結核菌血症ノ發現

E. Loewenstein.

Münch. med. Wochenschr. No. 7, 78 Jahrgang. 13, Feb. 1931.

Loewenstein ノ考案ニヨル培養基ヲ以テ流血中ニ於ケル結核菌ノ檢出ガ可能デアルコトヲ提唱シテキル。而シテ其ノ培養法ハ本誌(77. 26, Sept. 1930)ニ於テ既ニ發表サレタ通りデアル。

輕微ノ發熱ガアルバカリテ內科的ニモ亦レントゲンのニモ肺病竈ヲ認メ得ナカツタトコ

ロノ5名ノ患者ニ於テ著者ノ培養法ヲ以テ結核菌血症ノ存在ヲ認ムルコトガ出來タ。ノミナラズ其ノ後ノ經過ニ依ツテ是等ノ患者ガ結核デアルコトヲ確カメタノデアル。此ノ方法ヲ以テスレバ解剖學的ニ病變ノ進行シツ、アル例ニ於テハ約80%ニ於テ陽性ヲ示ス。斯ノ如キ血液材料ヲ以テスル試驗ハ全然他ノ診斷トハ無關係ニ施行サレタガ、同時ニ痲疾、徵毒、乾癱及ビ癩患者テハ常ニ陰性ニ終ツタ。結核ノ轉移性ノモノ殊ニ皮膚ノ結核テハ其ノ病機ガ急性ニ動キツ、アル間ハ此ノ血液ノ培養ハ常ニ陽性デアル。生殖器系統ノ結核ニ於テモ同様ノ狀況ガ認メラレタ。急性又ハ亞急性多發性關節炎テハ其レガ accidental ノモノテナイ場合ハ非常ニ多數ノ陽性ヲ示シタ。著者ハ又腦脊髓膜炎患者ノ血液中ニ於テ或ハ中樞神經系統障礙ノアル數名ノ患者ニ於テ矢張り流血中ニ結核菌ヲ證明シタ。然シ中樞神經系統疾患ノ際ニ於テ流血中ニ結核菌ノ證明サル、コトニ就テノ一般ノ結論ハ未ダ下シ得ラレナカツタ。

以上ノ様ナ所見カラ著者ハ此ノ血液培養法ハ他ノ結核ノ診斷即チ喀痰ノ檢査及ビTuberkulinreaktion 等ヨリモ餘程信賴ニ値スルモノデアルコトヲ提唱シ更ニ本法ノ診斷的又ハ豫後斷定上ノ價值ヲ以テ一般ニ應用サレンコトヲ希望シテオル。

## 雜

## 報

○黒屋政彦君歸朝 滯獨留學中ノ同氏ハ6月25日芽出度歸朝サレタ尙ホ同氏ハ上海自然科學研究所々員トシテ近日赴任ノ筈デアルガ出發ハ未定。

○學術集談會開催 6月25日午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會開催。演者ハ次ノ通りデアツタ。

1. 小腸絨毛上皮ノ吸收作用ニ於ケル原形質微細構造ノ態度 宮澤 國丸君

2. 哺乳動物各種時期ニ於ケル血液ノ1—2 糖類分解作用 1. 葡萄糖 2. ガラクトーゼ 村田 廣次君
3. アラストリム概説(綜説) 城井 尙義君

○學友會へ寄附金

金貳圓〇六錢也

安川 隆君

6月中職員異動調

- |      |             |       |
|------|-------------|-------|
| 月日   | 異動事項        | 官職氏名  |
| 5.22 | 昭和6年5月22日付願 | 研究生繼續 |

- |                                     |         |   |
|-------------------------------------|---------|---|
| 5.30 大阪府下へ出張ヲ命ス<br>ノ件許可ス            | 橋本 了    | 6.13 文官分限令第十一條第一項第四號<br>=依リ休職被仰付 教授石原喜久太郎 |
| 6. 1 昭和6年5月22日付願研究生入學<br>ノ件許可ス      | 囑託 勝田 適 | 6.20 埼玉縣下へ出張ヲ命ス<br>=依リ休職ヲ命ス 技師石原喜久太郎      |
| 6. 9 東京府下へ出張ヲ命ス<br>ノ件許可ス            | 山川 義信   | 6.20 歸 朝<br>技手 菅野 拓三                      |
| 6.10 北海道へ出張ヲ命ス 教授 河本 禎助<br>技手 菅野 拓三 |         | 6.29 任關東廳技師 技手 黒屋 政彦<br>叙高等官六等            |
| 13 文官分 附令第十一條第一項第四號                 |         |   |

ノ燐ハ溶解スルコトハナイガ其ノ存在ニヨツテ僅カナガラ酸素ヲ奪取スル作用ガアル。ソシテ培養基質面上ノ其ノ蒸氣ハ培養ヲ開イタ時ニ空中ノ酸素ニ對シテ培養ヲ防護スル働キガアル。尙此ノ燐ヲ加フルコトハSpirochaetaノ發育ヲ促進シ且ツ雜菌ノ混入ヲ防グ。斯クシテ著者ハ3年間モ累代培養ヲ行ヒ而モ其ノ菌ハ新シキ培養基ニ移セバ旺盛ニ發育スル。此ノ點カラ考フレバ Spirochaeta ノ分解産物ハ生活菌ノ發育ニ對シテ有毒テナイヤウニ思ハレル。著者ノ培養實驗ニ用ヒタ菌株ハ初期硬結カラ採ツタモノテ初メハ家兔腎臟ヲ入レ

タ血清寒天上ニ培養シタモノテアルガ動物實驗ニ於テモ同時ニ定型的ノ動物微毒ヲ起シ得ルモノテアル。斯クシテ著者ハ此ノ培養材料ヲ以テ變性微毒ニ對シ活動性ノ且ツ特異性免疫ヲ試ミルコトガ出來ルコトヲ認メタ。勿論培養浮游液ハ Spirochaeta ノ他ニ菌ノ排出物ヤ崩壞産物ヲモ含ンデキルガ Dementia paralytica ニ應用シタトコロデハ併發症ヲ惹起スルヤウナコトハナカツタ。唯治療上ノ應用實驗ハ未ダ完成ノ域ニ達シテキナイカラ將來ノ研究ニ俟ツトコロが多い。

雜

報

7月中職員異動調

昭和6年8月3日傳染病研究所

月日	異動事項	官職	氏名
5. 1	昭和6年4月24日付願研究生入學ノ件許可ス		宮脇 直一
6.23	埼玉縣下へ出張ヲ命ス	助教授	小島 三郎
6.30	北海道へ出張ヲ命ス	同	細谷 省吾
6.30	昭和6年6月30日付願研究生退學ノ件許可ス		下平 尙
7. 1	昭和6年7月1日付願研究生繼續ノ件許可ス		白杵 仁
7. 4	昭和6年7月4日付願研究生繼續ノ件許可ス		村田 廣次

7.10	昭和6年7月10日付願研究生繼續ノ件許可ス		藤田 猛
7.17	沖繩縣下へ出張ヲ命ス	助教授	細谷 省吾
	同	技手	川島 四郎
7.20	昭和6年7月17日付願研究生入學ノ件許可ス		澁谷 一郎
7.22	昭和6年7月17日付願研究生入學ノ件許可ス		飯淵かゐる
7.23	傳染病研究所ニ於ケル細菌免疫學研究業務囑託ヲ解ク		栗本 珍彦
7.23	任傳染病研究所技手		栗本 珍彦
7.23	昭和6年7月23日付願研究生繼續ノ件許可ス		高田 眞
7.24	傳染病研究所ニ於ケル治療研究業務ヲ囑託ス		土屋 毅

### B. C. G. ノ發育ニ就テ)

Joseph Hohn.

Zbl. Bakter. I Orig. Bd. 121, Nr. 7/8,  
Aug. 1931.

コノ Z-Einährboden ハ Einährboden ニ Haematin ト Malachitgrün ヲ加ヘタモノデアアルガ單純ナ Einährboden 又ハ其レニ Malachitgrün ヲ加ヘタモノケノ培養基ヨリモ優秀デアアル。ソシテ此ノ培養基ハ 2.5 %ノ Glycerin ヲ含シテキル。以前單純ナEinährbodenニ 1.25 %ノ Glycerin ヲ加ヘテキタガソレヨリモ此ノ方が有效デアアル。培養基ヲ凝固サセルノニハ 79°—30分。電氣加温装置ヲ應用

シタ。

此ノ培養基ヲ應用スレバ 人型ト牛型ノ結核菌ヲ其處ニ發育シタ大キナ 集落ニヨツテ鑑別スルコトガ出來ル。著者ノ實驗ニ 於テハ臨牀的材料カラ 培養シ得 200ノ 結核菌株ノ中、4例(2%)ノ 牛型結核菌ヲ得タ。

Calmette stamm ノ B. C. G. ノ集落ハ非常ニ人型結核菌ニ 似テキルガ而シテ獨特ノ型ヲモツタ集落トシテ發育スル。ソシテ 此ノ培養基ハ今日迄發表サレタ Petroff, Petraghani, Sweany-Evanoff 等ノ卵培養基ニ比ベテ優ツテキル。唯シカシ、培養基ノ調製ニ際シテハ著者ノ指示ヲ嚴守サレ度イ。

## 雜 報

### 八月中職員異動調

昭和6年9月1日

- | 月日   | 異動事項                  | 官職         | 氏名       |
|------|-----------------------|------------|----------|
| 8. 1 | 昭和6年8月1日 付願研究生繼續ノ件許可ス |            | 高須勘次郎    |
| 8.13 | 敘勳四等授瑞寶章              | 正五位勳五等     | 三田村篤志郎   |
| 8.13 | 昭和6年8月13日付願研究生入學ノ件許可ス | 輕部         | 久喜       |
| 8.13 | 東京府下へ出張ヲ命ス            | 技手         | 菊池 常雄    |
| 8.15 | 醫學部勤務ヲ命ス              | 衛生學講座擔任ヲ命ス | 教授 田宮 猛雄 |
| 8.16 | 東京府下へ出張ヲ命ス            | 技手         | 菊池 常雄    |
| 8.18 | 中華民國へ出張ヲ命ス            | 同          | 黒屋 政彦    |
| 8.21 | 任傳染病研究所技師             |            |          |
| 8.21 | 敘高等官六等                | 同          | 同 人      |

### 學友會へ寄附金

學友會へ次ノ如ク寄附アリタリ

- |            |        |
|------------|--------|
| 金七拾九圓九十七錢也 | 吉 積 恭君 |
| 金四拾九圓五十四錢也 | 松 本 薫君 |
| 金百圓也       | 白石 四郎君 |
| 金九拾壹圓參錢也   | 工藤 祐三君 |

金百圓也  
金百圓也

佐藤猪一郎君  
中島 勝美君

### 第十四卷第四號岡田論文

### 改良便所ニ於ケル寄生蟲ニ關スル實驗的研究ニ就テ

正 誤 表

頁	行	誤	正
373	3	頻 發	頻 繁
374	第 1 表ノ最下欄	11.8	18.8
375	第 2 表ノ上ヨリ 4 欄 目右端	13.1	23.1
377	第 3 表 第 1 回検査以下ノ欄	數字 1 ハ	○陰性 ○ナリ
378	第 3 表 第 1 回検査以下ノ欄	數字 1 ハ	○陰性 ○ナリ
379	第 3 表 第 1 回検査以下ノ欄	數字 1 ハ	○陰性 ○ナリ
380	第 3 表 第 1 回検査以下ノ欄	數字 1 ハ	○陰性 ○ナリ
381	第 3 表 第 1 回検査以下ノ欄	數字 1 ハ	○陰性 ○ナリ

### 追 記

前號 840 頁活動免疫ヲ目的トスル Sp. Pal-  
lida ノ培養(文獻抄録)ノ雜誌名ノ次ギニ[Nr.  
12, 57. Jahrgang, März, 1931.]ヲ追加ス。

細胞ト肉腫細胞トノ組織培養試験ニ應用シテ  
 キル。テ著者ハ之ヲ人類マラリアノ核ノ研究  
 ニ應用シタノデアアルガ熱帶性マラリア病原。  
 三日熱マラリア病原ノ有性。無性型ノ種々ノ  
 時期ニ就テ其等ノ塗抹標本ヲ空氣中テ乾燥  
 シ。昇汞酒精テ固定シタモノヲ檢シタ。シカ  
 シコノ實驗デハ Robertson (1927) ノ改良法ヲ  
 採用シテキル。ソシテ酸加水分解ハ5-6分ヲ  
 要シ。試薬ハ全部使用ニ先立チ新鮮ナモノヲ  
 作ツテ用ヒテキル。此ノ方法ニ依ルト上記ノ

Maralia plasmödien ノ核ハ全部陰性テ。同標  
 本中ノ白血球ノ核ハ顯著ナ陽性ヲ呈シタ。テ  
 著者ハ Robertson ノ改良法及ビ Cowdry ノ  
 言ヘル Protozoa 等ノ如キ動物細胞ノ本質的  
 構成分子唯シカシ其レハアマリ普遍的ニハ存  
 在シナイガトモカク其ノ要素デアアル Thymon-  
 ucleic acid が反應ニ與カルモノデアルト云フ  
 説ニ對シテ全ク豫期シナカツタ結果ヲ得タコ  
 トヲ述ベテ居ル。

### 雜

### 報

○講習開講式 9月14日午前10時所内  
 講堂ニ於テ第71回講習(公衆衛生學)開講式  
 舉行サレタ。

○學術集談會開催 9月17日午後1時  
 ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會開催。演題  
 ハ次ノ通りデアツタ。

1. 「リチン」ノ血球凝集作用ニ就テ  
 守山 英雄君
2. 血液ノ「リパーゼ」ニ就テ  
 大山 西一君
3. 沖繩縣ニ於ケル「デング」熱流行ニ就テ  
 細谷 省吾君  
 川島 四郎君
4. 「心臟ホルモン」ニ關スル研究ノ趨勢  
 (綜説) 宮川 米次君

#### ○學術集談會綜説擔當月順

從來月例ノ傳染病研究所學術集談會ニ於ケル  
 綜説講演ノ擔當ハ既ニ一巡セルヲ以テ。本  
 年9月以降各月ノ擔當ヲ左ノ如ク決定セリ。  
 昭和6年9月 宮川 米次  
 „ 10月 高木逸磨(城井尙義代理)  
 „ 11月 田宮 貞亮  
 „ 12月 山田信一郎  
 昭和7年1月 二木 謙三

昭和7年2月	細谷 省吾
„ 3月	河本 禎助
„ 4月	野邊地慶三
„ 5月	遠山 祐三
„ 6月	佐藤 秀三
„ 7月	三田村篤志郎
„ 9月	田宮 猛雄
„ 10月	西澤 行藏
„ 11月	長與 又郎
„ 12月	小島 三郎
昭和8年1月	城井 尙義

#### ○學友會へ寄附

一金五拾圓也 林 敏雄君

#### 九月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
8.31	依願免本官	技手	關根 綱矩
„	傳染病研究所ニ於ケル治療 研究業務ヲ囑託	同	人
„	傳染病研究所ニ於ケル治療 研究業務囑託ヲ解ク		塚原 國雄
„	任傳染病研究所技手	同	人
9.1	敘正七位	技師	黒屋 政彦
9.7	公衆衛生學研究ノ爲2年間		

シ此ノ際、免疫體ト免疫元(赤血球等)トノ結合ガ邪覽サレタモノテナイコトハ明ラカニ證明サレル。次ギニ尙ホ此際補體ノ蒙ル作用ハ次ノ實驗ニ依ツテ判明スル。即チ斯ク色素ヲ加ヘタ補體血清ニ Charcoal)ヲ加ヘテ色素ヲ除去スルカ、加熱血清ヲ加フルカ、又ハ血清アルブミン」ノ溶液ヲ加フルトキハ一旦消失シタ補體ノ溶血並ビニ殺菌作用ハ復活ザレル其レ故コノ際補體ハ全然消滅サレルモノデハナクシテ色素ハ補體血清ノ蛋白ト極メテ緩ヤカナ吸着結合ヲナシ、補體作用ヲ非動性ニシタモノデアアル。此ノ所見ハ他ノ色素ニヨツテモ認メラレルトコロデアアル。

他方、海猿血清ノ調理素作用ニ對スル Congored ノ作用ヲ見ルコトモ必要デアアルガ著者ノ實驗デハ、即チ正常血清ニ Congo redヲ加ヘタモノニ黄金色葡萄狀球菌ヲ加ヘ、37°ニ60分間作用サシタ後、遠心シテ沈渣トナツタ菌ヲ採リ海猿ノ白血球ヲ加ヘテ喰滯現象ヲ見テキル。勿論此ノ血清ニ於テモ補體作用ヲモ見テキルノデアアルガ、其ノ實驗ノ結果ニヨレバ一定量ノ Congo redヲ加ヘタ血清デハ補體作用ハ消失シテキルガ調理素作用ハ普通ニアル。即チ此ノ所見カラ考フレバ補體ト調理素トハ全然同一ノモノデハナイ。

雜 報

○學術集談會開催 10月22日(木曜)午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會開催。演題ハ次ノ通りデアツタ。

1. 長距離競走選手ノ人體計測ニ就テ
  - 中 込 巨君
  - 平 山 輝 夫君
  - 白 杵 仁君
  - 岡 正君
  - 木 村 政 長君
2. 運動選手ニ於ケル臨牀的所見
  - 平 山 輝 夫君
  - 白 杵 仁君
  - 岡 正君
  - 中 込 巨君
  - 木 村 政 長君
3. 長距離競走選手ノ血液學的研究
  - 岡 正君
  - 平 山 輝 夫君
  - 白 杵 仁君
  - 中 込 巨君
  - 木 村 政 長君
4. 肝細胞ノ膽色素成生能力ニ就テ
  - 正 津 正 榮君
5. フランスニ於ケル種痘行政ニ就テ
  - 城 井 尙 義君

月日	異 動 事 項	官 職	氏 名
9.30	依願免本官	技手	河瀬 純三
"	傳染病研究所ニ於ケルヲ囑託ス	治療研究業務	河瀬 純三
"	傳染病研究所ニ於ケルヲ囑託ヲ解ク	治療研究業務	山口 正義
"	任傳染病研究所技手		山口 正義
10. 5	衛生細菌學研究ノ爲滿3年間佛蘭西國ニ在留ヲ命ス	技手	大山 西一
10.15	東京府下へ出張ヲ命ス	助教授	小島 三郎
10.16	東京府下へ出張ヲ命ス		
"	學術實地指導ノ爲東村山村へ出張ヲ命ス		山岸 精實
10.17	出發(東京)18日横濱解纜	技手	大山 西一
10.20	愛知縣下へ出張ヲ命ス	技手	菊池 常雄
"	愛知及靜岡ノ二縣下へ出張ヲ命ス		
10.27	東京府下へ出張ヲ命ス	助教授	小島 三郎
"	神奈川縣下へ出張ヲ命ス		
"	神奈川縣下へ出張ヲ命ス		山岸 精實
10.30	大阪府下へ出張ヲ命ス	囑託	鐵本 總吾

10月中職員異動調  
昭和6年11月10日

Sarkom (Chicken tumor I) ノ發育ヲ顯著ニ促進スル。2) 此ノ促進作用ハ移植ニ用ヒタ腫瘍組織ノ乳劑デモ亦細胞ヲ含マナイ濾液デモ

同様ニ現ハレル。3) 鶏ノ睪丸浸出液ハ此ノ促進作用ヲ起サナイ。4) シカシ健康家兎ノ血清ハ輕度ノ促進作用ヲ起ス。

## 雜 報

**○家畜群靈祭舉行** 11月6日所内群靈塔前ニ於テ舉式。所内職員一同ノ參拜アリ。終ツテ新設ノ馬場ニテ「ビール」ノ饗應催サル尙ホ午後ハ民謡。舞踊。曲藝。茶番等ノ餘興ノ催シガアツタ。

**○滿洲軍慰問金募集** 11月20日宮川教授檜山事務長ノ提唱ニヨリ所内職員ヨリ題記ノ募集アリ。所内一同欣然トシテ應募ス。

**○高木教授。大和田技手歸朝** 11月21日。今春來。南米出張中兩氏ハ旅中恙ク。健顔莞爾トシテ歸朝サル。

**○學術集談會開催** 11月26日午後1時半ヨリ所内講堂ニ於テ集談會開催サレ。演題ハ次ノ通りデアツタ。

1. 最近日本ニ於ケル癩研究ノ狀勢

田宮 貞亮君

學友會へ寄附

金九拾六圓貳拾七錢

白石 四郎君

金參拾七圓九拾錢也

西澤 行藏君  
鯛瀬 國一君

### 11 月中職員異動調

昭和6年12月1日

- |        |                       |     |       |
|--------|-----------------------|-----|-------|
| 11. 2  | 群馬縣下へ出張ヲ命ス            | 囑託  | 山岸 精實 |
| 11. 5  | 茨城縣下へ出張ヲ命ス            | 助教授 | 小島 三郎 |
| ..     | ..                    | 囑託  | 山岸 精實 |
| 11. 7  | 岩手縣下へ出張ヲ命ス            | 囑託  | 鳥崎 正雄 |
| ..     | 愛知及静岡ノ二縣下へ出張ヲ命ス       | 囑託  | 中村二三郎 |
| 11. 17 | 神奈川縣下へ出張ヲ命ズ (横濱及川崎市へ) | 技手  | 工藤正四郎 |
| ..     | ..                    | 囑託  | 山岸 精實 |
| 11. 21 | 歸朝(伯國ヨリ)              | 教授  | 高木 逸磨 |
| ..     | ..                    | 技手  | 大和田信道 |

### 昭和六年度學友會々計報告 (昭和六年十二月二十一日現在)

總收入 金壹萬六千四拾四圓七拾貳錢

内 譯

金九千六百貳拾七圓貳拾參錢

金六千四百拾七圓四拾九錢

總支出 金四千八百貳拾圓五拾八錢

差 引 金壹萬壹千貳百貳拾四圓拾四錢

内 譯

金七千四百四拾九圓九拾錢

金參千七百五拾圓八拾壹錢

金貳拾參圓四拾參錢

前年度繰越

會費其他收入

雜誌印刷費其他

昭和七年度へ繰越

定期

當座

現金